

【第七五回研究例会 関敬吾の口承文芸観】

趣旨説明

関根 綾子

第七五回研究例会（二〇一八年十一月二七日 國學院大學）は「関敬吾の口承文芸観」と題したシンポジウムを開催した。会場では、関敬吾が昭和二十年代に執筆した子供向けの本や絵本（米屋陽一氏所蔵）と、関敬吾の直筆原稿（飯倉義之氏が解説）を展示した。

従来の口承文芸学史は、柳田国男が中心であった。柳田国男は今日の口承文芸学の礎を築いた人物であり、学史で取り上げるのは当然である。しかし、柳田国男以外の研究者のことも再検討するべきだと考え、例会委員で企画案を持ち寄った時、関敬吾を取り上げることを提案した。現在、昔話の話題は関敬吾が編纂した『日本昔話集成』（以下『集成』）、『日本昔話大成』（以下『大成』）に拠ることが多い。しかし、関敬吾については、知らないことが多い。生前の関敬吾を知る方々が少なくなっている今、関敬吾と面識のあった方からお話を伺ってみたい、そして記録として残しておきたいというのが、例会を企画した出发点であった。

関敬吾の研究についての座談会としては、関が逝去した一九九一年に『口承文芸研究』第十四号で掲載した「関先生と口承文芸研究」がある。出席者は、小澤俊夫、直江弘治、野村純一、大林太良という、関敬吾と面識があった当時の民俗学、口承文芸学の第一人者である。ここでは、関敬吾と柳田国男の昔話分類の相違点、関が研究していた昔話の国際比較研究などについて討論している。野村純一は晩年の十年程であったが、ともに『大成』を編纂するなど、親しく交流していた。また、直江弘治にとつては、柳田国男の木曜会で顔を合わせる先輩であった。つまり、この座談会に出席したメンバーは、関敬吾と同時代の研究者である。座談会での発言から、当時の学者達が、関の研究や人柄をどのように評価していたかがわかる。

本例会のパネリストである野村敬子氏と高木史人氏は、関敬吾と交流したが、研究仲間という立ち位置ではない。座談会とは異なる関敬吾の一面が聞けるのではないか、という目論見でお願いした。また、関敬吾の仕事に昔話の話題分類がある。昔話の国際話題分類に精通している加藤耕義氏に、関敬吾の昔話の話題分類の話をお願いした。

野村敬子氏と関敬吾との出会いは、野村敬子氏に、故郷の山形県真室川町で、満蒙開拓義勇団の帰還者から慰問袋に昔話が入っていたかを聞いてきてほしいという依頼であった。それが縁で、関敬吾と交流するようになった。関敬吾は論理性を重視し、学問一筋の人物であったそうである。関敬吾に「東のライ

オン」という異名がついたのは、関敬吾の研究姿勢が関係していたことや折口信夫と非常に親しかったことなどの逸話がいくつも語られた。その中でも、関敬吾はすべてを研究の対象にしていくという科学者としての姿勢で研究し、柳田国男は、問題のあるものは消去しようとしたという話は、両者の研究姿勢の相違を表したものとして印象に残った。発表を聞き、関敬吾の依頼が野村敬子氏のその後の研究指針になったのではないかと思った。野村敬子氏は、国際結婚や戦争など、口頭伝承の背後にある社会問題にも目を向けた研究をしている。その原点は、満蒙開拓義勇団帰還者への調査ではないかと感じた。

高木史人氏は、関敬吾の故郷である長崎県小浜で撮った写真のスライドを映しながらの発表であった。関敬吾の故郷が研究にも影響していることを明示するためだと思われる。柳田国男は『高原半島民話集』の序文で、関敬吾の故郷の昔話の中には作為のものがあると評した。関敬吾は最初は柳田国男の考えを容認していたが、後には反発する発言をした。柳田国男は再話を切り捨てたが、関敬吾は再話を改ざんだと切り捨てるのではなく、取り込むべきだと考えていた、と関敬吾と柳田国男の考え方の相違を指摘した。また、昔話は女性から女性へが伝承経路だと考えられがちであるが、関敬吾のように、父母から息子へという男性が伝承に関与することもあると問題提起した。

加藤耕義氏は、関敬吾の昔話の話型分類について発表した。関敬吾の分類整理は四度されている。その中でも、『集成』と

『大成』、『日本昔話の型』と「Types of Japanese Folktales」に分けられる。関敬吾が昔話の話型を分類整理したのは、国際比較研究をするためだという。現在、一般的に使われているのは、『集成』（大成も同じ）であるが、関敬吾は『日本昔話の型』が一番良いと考えていた。『集成』では、「動物昔話」、「本格昔話」、「笑話」の三分類をとっているが、『昔話の型』では廃止している。ハンズスイエルク・ウターもアールネ／トムソンの話型カタログを二〇〇四年に改訂した時、三分類を廃止している。関の分類は、日本の昔話だけにあてはまるものではないらしい。話型の分類の変遷を明確にしたことで、関敬吾が昔話の国際比較を見据えて研究していたことが、よく理解できた。

例会には、関敬吾のご子息、関信夫氏も出席した。会員からの質問に対し、関敬吾が自宅では一日十四、十五時間も机に向かっていたことなどを語り、寄稿もしてくださった。貴重な資料になると思われる。

なお、関信夫氏も書いているが、関敬吾の資料が遠野市立図書館に所蔵されていることを紹介しておきたい。また、『国際化時代を視野に入れた説話と教科書に関する歴史的研究』（二〇一四 東京学芸大学）に関信夫氏、野村敬子氏が関敬吾に関する文章を寄せている。併せてお読みいただくと、関敬吾の人となりにより一層理解できると思われる。

（せきね・あやこ／昔話伝説研究会）